

E っ ん っ

青木 章子

帰国して、早くも三か月がたちます。五年間ロサンゼルスに滞在し、その間、学生になり、教育実習を受け、公立小学校で担任を経験しました。あちらの社会の中に入り込んで生活していくにつれて、感じ方や行動の仕方など、自分の多くの面が変わってきたと思っていました。帰国前には、日本に戻ったら再適応が大変かもしれないと、考えていたほどです。ところが、住み慣れた所で再び暮らし始めると、自動的に昔のままの自分が蘇ってきて、あちらでの自分、そして生活は、本当だったのだろうか。それは遠い遠い夢の中のことのように思えます。変わるのではなく、必要に応じて、自分の新しい面、それまでとは異なる面が引き出されるのであって、自分の置かれたそれぞれの環境・文化の中で、人はそれに合った適応の仕方をするということなのでしょう。

私があちらで受け持っていたのは、学習障害や情緒障害などのある子供達の為の、高学年の特殊教育

学級で、カリフォルニア州では、スペシャル・デー・クラス (Special Day Class) と呼ばれています。本来の担任が、子供達の行動をコントロールできず、過労で倒れた後、完全に無秩序になっていたクラスを学年の後期から引き継ぎました。始めは危機的状况が多くあり、大変でした。

担任を始める直前にクラスを観察していた一日、体育の授業でサッカーをしていた時、何かにかつてきたJが、凄い形相でBを追いかけ始めました。Jは怒ると自分をコントロールできなくなり、容赦なく殴る蹴るの暴力をふるうので、気をつけるようにと言われていました。私は、Bを守ろうとして駆けつけ、Jに止まるよう言いながら、逃げ回っているBを自分の方に引き寄せました。Jとの間のついたてになろうとしたつもりなのですが、Bはひきつった顔で私の手をふり払い、「おまえは嫌いだ。ぼくの方に来るな」と怒鳴り、泣き叫んで教室の中に駆け込んで行きました。気が立っている子供に手を触

れたのは、誤りでした。私の失敗で事態が急転し、誰もけがをせずに済んだのが、幸いでした。

皆が恐がり、「危」マークをつけられていたJとのつき合いは、たった一週間でおしまいでした。家で母親をつき倒して踏みつけ、恐れた母親が警察を呼び、彼は専門の施設(学校)に送られました。複雑な家庭環境・生育背景がありそうでした。彼は、学習することへの意欲が強くて頭も良く、教えるのが楽しい子供でした。授業中、見事なことを見事だとほめると、得意気で嬉しそうな幼児の表情を見せ、そんな表情の中に、いつもは大人ぶり、凄んでいるJの、本来の姿を見た気がしました。大人から、気づいてほめてもらったり、認めてもらう喜びを体験してこなかった子供、そして、何らかの経験によって、子供時代を、安心して子供として生きることを奪われてしまった子供のようで、不憫に思います。

担任を始めたばかりのある一日、下校後の送迎バスの中で、Sが怒ってNの首をしめた出来事もありました。クラスの子供達がバスに乗り込むのを見届けた後、いつもはすぐに教室に戻るのですが、その日は悪い予感がしたのか、しばらく校門の傍に立って、バスを見ていました。すると、中で何か大きな動きが起こっているのが見えました。何だろうと近づいて見ると、運転手が大声で、「先生を呼んできて」と叫んでいます。駆け込んで目に入ったのは、Sの腕をNの首からひき離し、大柄なSの体を必死に抱え込んでいる運転手。そして、床に仰向きに倒れたまま、呼吸困難のしゃがれた声で「殺してしろ。殺してしろ。」と泣き叫び、Sをあと立てているN。追いつめられて逆上し、恐ろしい表情をしたSを見た瞬間、これは大変だと思った私は、彼に手をさし伸べて、「大丈夫だから、私と一緒にいらっしゃい。」と、穏やかに、かつ強く、言い続けました。少し落ちてきたSは、私の手を取り、

バスを降りようと一緒に出口まで来たのですが、中から再び「殺してしろ」と、Nの絶叫……。振り返って突進しようとするSの体を私はしっかり押さえ、鬼の形相かつ腹の底から大声で、「Never say again（そんなことを口にするんじゃない）」と、Nに向かって一喝。Sには穏やかに、「一緒にいらっしゃい」と話しかけ、彼を校長室まで導きました。Sは、別人になったような凍りついた表情で、「彼を殺してやる。彼を殺してやる。」と繰り返していました。校長室にSを座らせて、外で校長と話し始めた頃には、私の方が興奮で声もうわずり、このようなことがこの子達の間では日常茶飯に起こっているのか!! と、ショックを受けていました。SもNも、又、Jも、衝動をコントロールすること、今までの成長の過程で学んでこれなかった子供達です。怒りなどの感情をコントロールする力だけでなく、欲しくても他人の物は取らない、盗まないなどの、欲求をコントロールする力も育っていません。

んでした。既に体も大きく、力もあり、思春期を迎えようとしています。このまま衝動を制御することを学ばずに大人になっていけば、冗談でなく、将来は監獄に入っているか、殺されていると、私は、校長に向かって怒っていました。ギャング同士の闘争で、若者の命が毎日消えていくロサンジェルズにおいては、あと数年の将来の話です。

子供同士の暴力と、先生の指示を何とも思わない無秩序を早急に治める為、私は担任第一日目より、文具や玩具やキャンディーのいろいろ入った“宝箱”なるものを、クラスに用意しました。そして、他の子供のことを考えたり尊重して行動した時、人の話をよく聞いていた時、状況をよく考えて行動した時、感情や欲求をその子なりにコントロールできた時、ベストをつくして学習した時などに、それに気づいて心からほめてあげると同時に、小さなシールを各自に渡しました。彼らはそれを大切に集め、

子供によっては、いくつ集まったかを見るのが楽しみなのか、又、自分がこんなにたくさん良いことをしていると、いつも目の前で確認したいのか、シールを集めて貼る自分の紙を、机の上に貼りつけていました。シールがある数たまると、宝箱を開ける時で、好きな物を一つ選んで持って帰って良いのです。児童学を学び、子供の主体性と、内からの育ちを重んじる保育を実践しようとしていた頃には、思いつかなかったことです。即物的に育つのを助長するような、子供を物で操作するような後ろめたさは時々感じましたが、不満と敵意に満ちた彼らの顔が、喜びにほころぶ瞬間を想像しながらの、宝箱の中身の買物は、しばらくの間、私と主人との毎週末の楽しみになりました。(子供達の話は、二人でよくしたものです。それぞれの子どもが興味を持ちそうな物は、あれかこれかと話しながら、男の子の好きそうな物を彼にも選んでもらいました。いつも快晴の空の下、短パンにTシャツで、車でどこにでも

すぐに行けて、混雑のない広い店でショッピングできるのは、ロスの、疲れずに楽しいところです。）

弁解するようですが、私の意図は、子供達の行動を早急にある方向へ導こうとする以上に、彼ら自身が気づくことの少ない、自分のもっているたくさん良いところ、自分のしているたくさん良いことを、目に見え、手に取る形で、しっかりと知って欲しいというところにあったように思います。私とのあいだの、言葉のやりとりだけの普通のかかわりは、彼らがそれらを認識できることなく物事が流れ去っていくような、そんな感触があったのです。

クラスが落ち着き、子供達と私との信頼関係ができてくるにつれて、シールは次第に、しょつ中忘れられ、宝箱も数か月でなくしてしまいました。ところが、ごほうびシステムだけは捨てきれずー私の中に、その自信がなかったのかもしれない、一年半を経て、子供達はたまにもらうシールを集めては、数人で一緒に料理をして、ランチタイムに私と

食べるなどということをしていました。

欲求や感情の衝動をコントロールする力の育ちに、大変関係があると思います。BやS、N、J、そして今日は長くなるので紹介しない他の大変な子供達に共通に見出されたことがあります。それは、彼らには、自分を信じる力と言いましようか、自分に対する肯定感のようなものが十分に育っていないということです。生まれた時から大人とのかかわりの中で育つべきはずだったものが、育っていないのです。自分を支える内からの力が弱いだから、追いつめられやすく、非常に不安定です。

例えば、Bは、彼のした悪いこと、すべきでなかったことを私から指摘されたり、自分のしたくないことを私からするように指示されたりすると、かんしゃくを起こして持ち物を引き裂いたり、塗りつぶしたり、机の下に長い間しゃがみ込んだり、叫んで外に飛び出してしばらく戻って来なかったり、と

ということが度々ありました。批判を受けることや、フラストレーションに、耐えきれないので。彼は、出会ったばかりの頃、暗く無表情で閉じ籠もっているか、激怒して飛びかかってくるのだけれど手を出すことはせずに、泣き叫んで走り去っていく、という両面を見せる子でした。心の奥底で、自分はだめな子だ、価値のない存在だ、自分は愛されていない、と思っているようでした。自分に対するこの感情は、Sにも強く見られました。彼らが求めているもの、必要としていたことは、誰かから理屈なしに愛されたり、受け入れられたり、本気になって叱られたり、世話される体験—まさにこれらは、赤ちゃんの、そして、幼児の体験です！—そして、自分について誇らしく思ったり、満足して気持ち良くなる体験の、積み重ねだったろうと思います。

他の学校に転校していったSは、最後の日、他の物は机の中に置いたまま、前述のシールの紙だけをはがして、持って行っていました。子供達の去った

後の教室で、思わず可笑しくなり、彼にとって大事な物だったんだなあと思ったのを覚えています。苦労して集めたから、捨てるに忍びなかったのでしょうが、彼にとっては、良い子であることの証拠、そして、ほめられたこと、自分にとって満足したこと、楽しい思い出だったのかもしれない。

スペシャル・デー・クラスで出会った子供達は、教師をすぐに力関係の争いに陥れ、絶えず挑戦と試練を与えてくれる“つわもの”揃いでした。同時に、それまで経験したことのない“情熱”のようなものを、私の中から湧き起こさせる人達でした。彼らの多くは、“捨てられた”子供達です。幼児期に、自分にとって大切な大人から捨てられた、という体験をしてきています。ある子は、内に怒りを抱き、ある子は暗い“うつ”を抱え、社会的にもうまく適応していません。

あちらでの私は、よく叱る、うるさくてしつこい

教師だったと思います。それまでの、子供の背後から、子供にはわからないように助けたり、導いたりするなどというスタイルは、どこかに投げ捨ててしまいました。私の関心が、主体性の育ちうんぬんには、主になかったからです。

親から愛され、手をかけられてきた（手をかけら

れすぎている？）子供達に再び接すれば、きつとまた、Eさんと一緒に働いていた頃のような先生に、戻るだろうと思います。

こちらの子供達についての、何かおもしろいことを、今度Eさんから伺える機会を、楽しみにしていきます。（元・お茶の水女子大学附属幼稚園）

